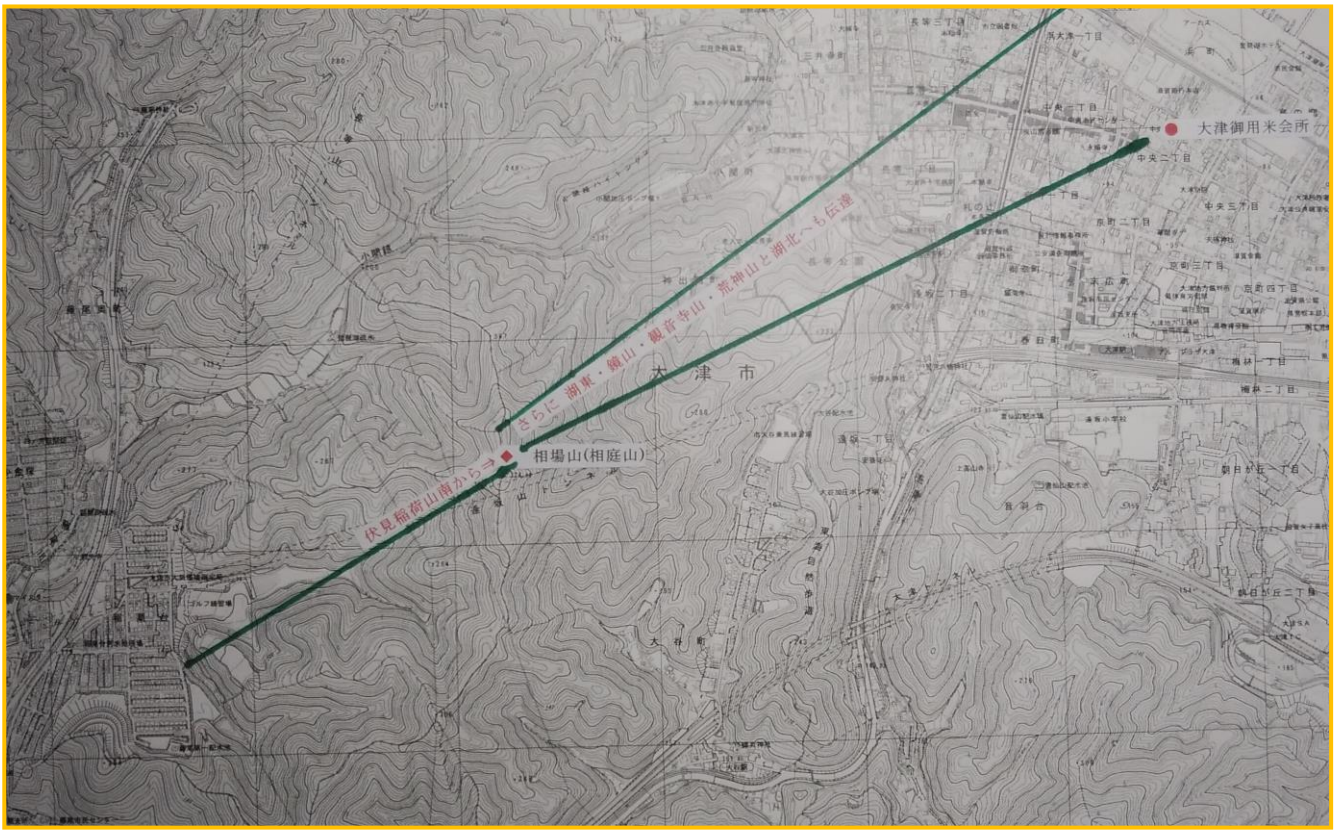
大津百町瓦版

秋　季　号［No．４５］
２０２０年　１０月
発行　大津の町家を考える会
大津市中央１丁目８－１３
TEL・FAX　077-527-3636

大 津 ・ 町 家 ・ まちなか ・ いろいろ情報

Email：otsu.machiya@gmail.com



大津御用米会所と相場山

東海道随一の都会であった大津は、隣の大都市京都、大坂に近くびわ湖水運によって運ばれてくる米穀の量は他の町々にないものでした。

当時の米仲間は、問屋を中心とする株仲間(問屋・小売屋・荷米屋)が幕府に銀換算で買い受け米会所において取引の仲介を行っていました。しかし京都の商人が大津に入って米取引を行ったり、株仲間による不正が横行するなど取引の低迷が続くなかで米価が他の諸商品に対して低落するという状況が続いたことから幕府が乗り出し、享保二十年(1735)「大津御用米会所」を成立。問屋を中心に組織的に整備したうえ、さらに大坂と同様の商取引の盛んな大津での相場立てを許可しました。

大津での米相場は取引量の大きい大坂堂島の米相場が参考にされていました。堂島の相場を大津へ知らせるには、飛脚や伝書鳩による伝達もありました。しかし速く知らせるのが重要ですから手旗信号による伝達にとって代わられました。

文化十二年(1815)園城寺三別所の山頂に、米相場の「気色見」の場所(一間半四方)をと拝借を願い出許可されたのです。その場所は明治十四年の『近江国滋賀郡誌』に「相庭山」の名前が出ていて、現在の地図で見ると小関越と逢坂山の間にある小関山(325ｍ)ではないかと云われています。

大坂の堂島から吹田・千里山→高槻・阿武山→柳谷・西山→稲荷・二石山→小関山のコースに点在する「気色見」に旗振り人と遠眼鏡(望遠鏡)を持った者が登り、大坂・堂島の米相場の午前と午後二回の相場高下を受けていたのです。幾つかの相場伝達に関する資料によりますと、この通信手段は驚くほど速くなんと大津まで５分の速さだったそうです。

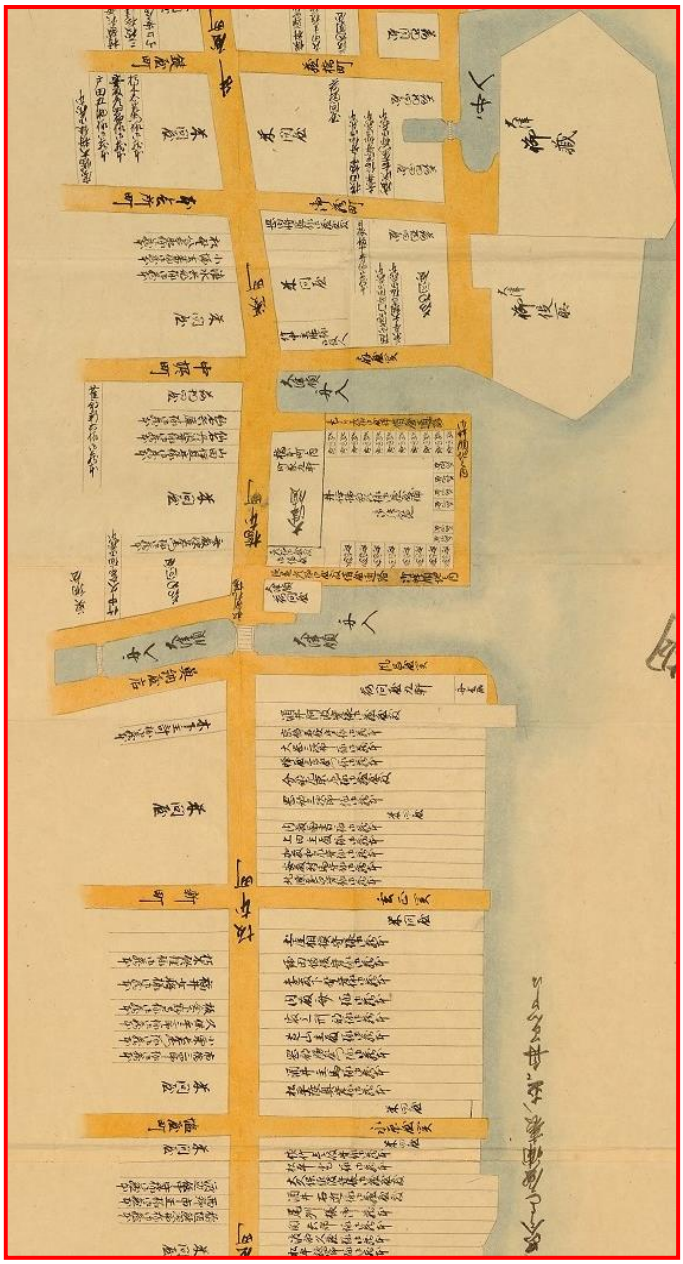
電話が開通した明治二六年、大坂＝和歌山の間で電話と旗振りと競ったところ、初期電話は約一時間掛かったのに対して旗振りはなんと３分だったようです。

【編集担当記】

浜通りにずらりと並ぶ米蔵

琵琶湖の湖上運送拠点は中世の時代は坂本や堅田が中心でしたが、織田信長から豊臣秀吉の時代になると大都市である大坂・京都への運送に利便性の高い大津に拠点を移し、秀吉は船持集団の『大津百艘船』を創設しました。『大津百艘船』は大津から積み出される物資と人を運ぶ独占的な権利を与えられたことにより、大津は米穀の大きな取引市場となり大津浜の湖岸には米蔵が立ち並びました。

下記の絵図は、享保四年(1720)頃の大津百町湖岸の絵図ですが、大津城跡の幕府の御蔵、彦根藩の彦根蔵と大きな蔵の他、小さい蔵まで含めるとなんと１００近い蔵があったようです。絵図が小さく見辛いですが沢山の蔵が軒を連ねています。そして其々の蔵の間には蔵の管理を委託された米問屋が多くみられます。



上絵図は大津市歴史博物館所蔵「大津町之内　浜通之図」より

大津は江戸時代全国でも有数のお米の集積地であったことをご存知の方は多いと思います。大津の現在の浜通り側から湖岸にかけては全国の藩の米蔵が林立していました。

琵琶湖の湖上運送と大都市京都・大坂に近いことから、近江に領地を持つ有力大名や各藩の旗本、寺社、門跡、公家から集積される米の蔵がずらりと並んでいたそうです。

大きいものでは、幕府の蔵「御蔵」との町名が今も残っています。北保町にあった金沢松平加賀守前田家の蔵。そして前号町名の項でも少し書きましたが彦根蔵。右ページに彦根蔵の図面を乗せましたのでご覧ください。これは佐和蔵と云い橋本町北側一圓を井伊侯が拝領して此処に蔵を置きました。ここに納められる米は、凡そ四萬俵から九萬二千俵（天保八年五月(1837)）此地唯一の大蔵でした。それは俗に「澤米」と証し、当地米市場の建米として古来有名で、彦根藩士が常に在住して拝領地城内での一切の事件を支配し、大津代官の支配の及ばない所でした。

大津百町は米屋株持 600軒も!!

米屋仲間は「三株」と称して、**問屋株・小売屋株・荷米屋**(にないまいや)株の区別がありました。問屋は米穀移出入の実権を握っていて米会所の役員にもなれました。

小売屋は別名平米屋とも呼ばれ、大津町中に店を出し米穀一般を小売していたそうです。

荷(にない)米屋は、白米屋または荷売屋とも称して白米のみを売りさばき、俵米の積み送りはできず、袋入りの白米を荷い売っていました。

問屋、小売屋、荷米屋と三株の仲間の株の譲渡にはすべて米会所の承認が無いと認められませんでした。

ではそれぞれの株所有者はどれ位あったのか？**問屋株は７４軒、小売屋株は３２９軒、荷米屋株は１９７軒と云いますから、**ちょっと驚きます。

この百町瓦版夏季号で酒屋の小売株が７７軒もあった事を書きましたが、米屋はその酒屋どころでないそれこそ大津百町内は米屋ばかりです。

こうした株仲間と別に、昔から仲(すぁい)仲間と呼ばれるコメ取引を仲介し手数料を取る者もいました。この仲間は株が固定されると、仲(すぁい)仲間が有していた地位が不安定でありこれまで同様にして頂きたいと、米屋仲間役人に申し出ていましたが代官には取次されず。享保期以降は凡て米問屋仲間の支配下に完全に入りました。

米の流通だけではなく、諸物資は大津ばかりに来ず、下坂本村や唐崎浦を経由して山中越・白鳥越・小関越の間道を通って京都へ、はては南郷浜村、関津浜村と瀬田川沿いに抜ける者も多かったようです。

天保の飢饉と株仲間解散

そして天保年間(1830～1844)の大飢饉による農村の疲弊が深刻になり、各地で一揆や打ちこわしが頻発し諸物価も高騰して行きました。いわゆる「天保の飢饉」により幕府は一連の株仲間解散令を天保１４年(1843)触れます。一部の株仲間は鑑札を京都奉行所に差出していましたが、なかなか一筋縄ではいかなかったようです。

また幕府の仲間解散令の狙いは、横行してきた独占的な営業を行う株仲間の解体にもあったようで、仲間そのものの解体ではなかったようでした。

その後一転して嘉永４年(1851)株仲間再興令が発布されたのです。さらに慶應４年(1868)鳥羽・伏見の戦いを最後に明治新政府が出来、しばらくは米仲間の人数増減の届け出を認め米会所の相場立ても認めていました。

米屋に限らず他の株仲間による閉鎖性打破は理解されませんでしたが、最終的に明治５年(1872)大津のすべての株仲間は解体されました。

上図は大津市歴史博物館所蔵「彦根藩大津屋敷之図」より　(この蔵屋敷にあった□稲荷が現在浜通りにある彦田稲荷神社です)

気になるお店

カフェレストラン　インティ

びわ湖を望む素晴らしい景観　降り注ぐ陽光

今回のお店紹介は、大津市歴史博物館と市民文化会館が併設されいるところ。一階のテラス側にオープンしたカフェレストラン「インティ」です。この場所には以前からここにレストランがあったのはご存じの方も多いと思いますが、きっと今までのお店の雰囲気との違いに驚かれると思います。このコロナ禍での新規オープンですが、県内の食材によるランチメニューとこだわりのコーヒーで勝負を-と7月に開店されました。車が通る道路にも面せず、かと云って人通りがあるところでもない所ですが、びわ湖に架かる虹や降り注ぐ陽光が見渡せる景観が最高です。

オーナーの荒川孝男さんは定年後は奥さんと二人でカフェを営業したいと、仕事の傍ら京都市内の老舗コーヒー店に通い勉強を重ねてこられたそうです。内装も全部ご自分で考えられ、コーヒーチケット(￥３９００)を購入入すると自分専用のマイカップとしてキープすることも出来るなど、楽しめるカフェの様々な工夫がされています。

光るコーヒー焙煎機

お店の名前の「インティ」は南米インカ帝国の太陽と虹の神にちなんで付けられたそうです。荒川さんはなんと長等商店街にあった大黒座(映画館)の隣の生まれで幼少期は大津で過ごされたそうです。

定休日　月曜日(日・祝により変更有)
営業時間　九時～一七時
電話　０７７（５９９）４５７０

マイカップサービス

またまた読者からお知らせ

銘酒と詠われた『夕照』

この『瓦版』夏季号で紹介しました朝鮮通信使が膳所の太守（本多氏）からの提供で瀬田／大萱新田にて戴いた『夕照』という銘酒についての詳しい資料が有ると提供頂きました。

これはもともと幕府が作成した「五海道其外分間見取延絵図」を近年見易く書き改められたもので、東京美術社が昭和六十年発行したものの中に書かれていたものです。

東海道・膳所藩領の橋本村についてのところで、村高は三百七十一石余。神領から勢多（瀬田）橋東詰まで、長さ一町四五間余。残らず家居あり東西は狭いが賑やかな街道集落であった。

この橋本村のところで『近江興地志略』によると書かれ「艜舟(ひらたふね)が五十艘あり、酒を醸造する富家が多くとくに勢多夕照酒はこの地の名産として聞こえた」このように勢多の『夕照』はやはり地域での銘酒であったようです。現在その酒屋を特定できる酒屋は判らないようです。

前夏季号で大津百町の酒屋が七七軒も有った事を掲載しましたが、石山・膳所もと調べれば本当に多くの酒屋があったことと思われます。

大津市歴史博物館開館３０周年 記念企画展

大津市歴史博物館は今年開館して３０周年の記念すべき年になります。同館では今年４月からの充実した企画を計画していましたが、コロナ禍の影響でいろいろ大変だったそうです。

こうした中でこの秋に開催されます。『聖衆来迎寺と盛安寺』展は見逃せない企画です。

比叡山の麓の港町として栄えた下阪本地域にある聖衆来迎寺は近江の正倉院とも呼ばれ著名な国宝・重要文化財が所蔵されています。このなかで特に国宝の六道絵は国立博物館に分散展示されているのですが、今回の企画展で初めて全幅一堂が展示される貴重な機会です。また盛安寺の近江を代表する十一面観音立像などの名品もずらりと並べられます。

開催期間　10 月 10 日(土)～11 月 23 日(月・祝)
観覧料　一般¥800　高大生¥400　小中生¥200
詳細は大津市歴史博物館まで 077-521-2100

疫病終息祈願

三井寺 国宝 金堂内陣にて

災害や疫病が蔓延する現生や煩悩に対し、災害や疫病もない清浄な理想郷を目指し、古来から人々は佛菩薩を祀り願いを託してきました。三井寺では国宝金堂内陣に昔から祀られて来たご本尊の秘仏弥勒菩薩を中心に、阿弥陀如来坐像・阿弥陀如来立像・薬師如来立像など浄土のみほとけを遷座し、疫病退散を願う法縁の機会が設けられます。

浄土のみほとけ

特別参拝期間11月7日(土)～11月29日(日)
特別参拝料　500円(入山料が別途必要)

国宝金堂は豊臣秀吉の正室北政所により慶長四年(1599)再建された天台系密教仏堂様式を伝える桃山時代の名建築です。三井寺は正式名称は長等山園城寺(おんじょうじ)と云い見どころの多い大寺院です。

詳細は三井寺 077-522-2238 又はホームページ

編集後記

この瓦版、最近の号は江戸時代旧町名の事、造酒屋、今回の米蔵と歴史記事が多いので心配(読んでもらえるか？)しています。この秋はコロナ退散を願い大津市歴史博物館３０周年記念企画展と三井寺での疫病終息祈願特別参拝に出掛けられては？　［Ｋ．Ａ］